小曲二十篇

漢那浪笛

青空文庫

落葉のなげき

よする年波とゞめかねず、
われや落葉あわれ淋し。
名知れぬ浜に流れ漂ひ、
朽つるその日あやめわかぬ。

白く冷たき浪のたわれ、
目的(めあて)知らねば運命(さだめ)のまゝに、
浮きつ沈みつ夜を日にかへし、
息(やす)む隙なき道のつかれ。

暗らき浮き世をたどる心、
なほもなごめる恋し草びら、
岸に匂へる色を見れば、
すてゝ立ち去る思ひたえじ。

物の哀れ

道をあゆむに痛みつかれ、
「命」淋しく胸に雫き、
想ひ静かに果てを観ず、
鳥の調べに眼うるみ、
花にそゝぎしもろき涙、
若かき岸辺をさかりゆきぬ。

物の哀れを悟る今宵、
窓にさしこむ星の光、
やせし憂ひの琴を渡る。

まぼろし

おぼろに映るものゝかげ、
うれしと見れば悲しげに、
只だかきくるゝ静心（しづこころ）。

いたく乱るゝ黒髪に、
嘗てはかゝる夢なれど、
今はたいかに——滅（き）えさりぬ。

あゝカナ〳〵や鳴く虫に、
静か心もあたふたと、
綾目うすれて西さがる。

春

春は来にけり、きさらぎの、

風かぐはしく吹き過ぎて、
春の弾く音に、春の歌、
心くまなくうるほひぬ。

また喜びは眼(め)にうつり、
愛なる土地(つち)のうらやすに、
うつら〳〵の夢枕、
かつぐ貌の花衣。

昼は静けき窓(まど)のうち、
心の絃(いと)にたちかへり、
夜はよもすがら胸のうへ、
あえかの夢を吹きおくる。

朝

朝なり、やがて君と吾れ、
二つにさかる悲しさよ。
冷たき鐘のゆさぶりに、
心の淵のからさわぎ。

人のこの世にめでたきは、
只だ夫れ春よ、愛なれど。

涙ににじむ心中の、
辛らきなごりにかへがたし。

望郷

落日々々……、
独りたゝづむ名知れぬ浜辺、——
悲し海原生れの故郷。

翼なき身の只だ茫然と、
入日うすれて、悲哀のしらべ、
海のかなたへかすめて去りぬ。

かくて幾夜を故国の夢に、
こがる心は、そこゐも知れぬ、
暗路たどりて闇夜に沈む。

小曲

春の日の空はみどりに、
地は花に匂へる時を。

眼(め)はうすき光にぬれて、
あたゝかき思ひすゞろぐ。

やはらかき耳かたむけば、
吾はきく、ああ吾が胸に、

懐(なつ)かしき、悲しき曲(ふし)の、
滴りを——かすけき声を。

海のさち

なだれの夕日をまともに浴びて、
椰子の樹(き)棕梠の樹たわゝに実のる、
入江の汀にならべもたてし、
島人どもが一日の獲物。

深海(ふかみ)の底より拾ひ得しは、
阿古屋、真珠の白金(しろがね)真玉、

はたまた珊瑚の宝をかさね、
海にも山にもとこめづらしき。

宝の分与(わけまえ)心にたれば、
やさしき妻子と手に手をとりて、
なつかし南の調べを唄ひ、
各々別れて誼(よしみ)をまもる。

北半島

力なければ、埋もれて、朽ち果つべしと、
かねて知り、綾目(あやめ)うするゝ北の国。

代々の血染(ちそめ)のその歴史、あな惨(いた)ましき、
民族の、心にもるは闇の色。

生きんとすれば、物うげな牙(きば)さしむくる、
やからもの——忍辱守(にんにくも)るに道はなし。

愛の絃(いと)かけ弾きならす、心さへなき、
やからにぞ、祖先をほこる道ありや。

天は天とし輝きぬ、さは言へ人の、
地の上、何んとてしかく惨(いた)ましきかな。

◉飄遊詩の一部

秋

黄(きば)たゆむ山ふところに、
今日もまた吾れ暮れゆく。

夕まぐれ、空より落つる、
その際（きわ）にひろごる木の葉。

冷やけき土地（つち）にひたりて、
しく〳〵と泣き入る憂ひ。

緑葉の真夏（まなつ）のしらべ、
今こゝに歌ふ得べきや。
悄然（しよんぼり）と佇む木々は、
たゞ無言——風吹きすぐ。

口笛

物の哀れは五月雨（さみだれ）の
いとしめやかな窓のうち、
光も暮れて朦朧と、

つれなき人のたゝずまひ。

無言の吾れと吾前を、
別れの手振りかすれては、
うつら〳〵の口笛に、
脈うつ胸のどんはたり。

とん〳〵たらりその胸の
曇れる中を笛の譜を、
綾をみだしてゆほびかに、
流れて曲(ふし)のきはみなし。

あゝ西さがる寂寞(しやくまく)に、
せめては君が笛の譜を、
物倦(うん)ずまで聞きたさに、
喉ふさぐ迄また言(こと)もなし。

片葉貝

吾がかなしみは灰色の、
貝にもりたる辛(か)らき夢。

磯の潮にたゆたひて、
眼(め)もいたましき傷の跟(あと)。

真砂にくぼむあなうらの、
古き印(しるし)にひたりては、

すべてを観ず哀愁の、
心も千々に味ひぬ。

もとよりさけし片葉貝、
はぐれて縁のうすければ、

砂にうもれて、うたかたの、
世をこそ遂のさだめなり。

哀音

――故渡久地政佐君を悼みて

奥津城の闇をもりたる、
その底に君ねむる時、

あやなくも時雨(しぐ)るゝまなこ、
悲哀(かなしみ)はたえず雫きぬ、

年若かき愁ひをおびし、
臨終のほそき泣き声――

身動(みじろぎ)も得ならぬ思ひ、
君ならで誰か知るべき。

のこりたる吾等友がら、
明闇の境(きはみ)にたちて、

なつかしき君が声する、
その方へ憧(あこが)れわたる。

夜

物倦(うん)ず、夜の十二時、
死に似たる周囲(あたり)に、泣くは、
たゆみなき時計の刻み、
あわれ、その闇の滴り。
かくて世も過ぎゆくものか、——

胸のぬち心の海は、
惨(いた)ましき綾を印(しる)して、
日輪のかゞなふ気色(けはひ)。
薄命の青き灯(ひ)の華、
かすれゆく光を見れば、
寂滅や今か——吾が身も、
うつぶせぬ、冷たきねやに。

影

阿古屋の玉をとき流し、
輝きわたる心には、
色さま〳〵の夢の華。
うつして咲きぬ、艶たちぬ。
さはさりながら吾が秋の、
坂のぼりゆく寂寞(じやうまく)に、

影うすれゆき、色蒼(あお)み、
玉の光も鈍褪(どんざめ)ぬ。

白明

罪も汚れも一斉(さい)に、
花みだれ咲く森の奥、
只だ吹上の水の下(もと)、
ひたりて更にときながせ。
悲哀の琴(きん)に指ふせて、
物の哀れを泣くなくは
あだしこの世の泡(あわ)ごころ、
すべてを捨つによしはなし。
枕重ねて宵(よひ)々に、
心こめたる涅槃(ニルバナ)※も、
碧空(あをぞら)ひくき垂れさがる

恋しき森の末なれば。

漁夫

夕日さす遠(とほ)の海原、
追風に浪にゆさぶり、
阿旦葉(あだんは)の葉づれにまじり、
南国の浜の静けさ。

白き帆のたわむ刳舟(くりぶね)、
湾(いりうみ)に絶えず入りこみ、
銛(もり)かづぐ南蛮人は、
あかがねの額日(ひたひ)にゆれ、

投げかわす魚族のあまた——
白銀（しろがね）の鱗ひるがへ、

或はまた胸肉（むなじし）はりて、
大鮫（おおざめ）を引きずる景色——

熱帯の華奢（くわしや）のきはみを、
つくしたる絵巻の模様。

日も暮れて江の底にごり、
物のかげ朧ろにさすや、

椰子茂げる漁村のかひま、
紅々（あか）と灯（ともし）いざよふ。

人ふたり

空さむき冬の窓ごし、
灯(ひ)は消えて町の暗(くら)がり、
ものゝ音も絶えて久々。

その中を若かき愁ひの
人ふたり添ひつ別れつ——
疲れ倦み眩暈(くるめく)けわひ。

吾れは今、うするる影に、
物事(ものごと)の終り味ひ、
戸をしめて胸をいだきぬ。

森

夕暮れを森をいそぎぬ、

吾れ独り、あゝ吾れひとり、
物も得云はぬ唇に、
色おのづから憂愁の
無言の吾れを語るなり。

実に若かき身は熱帯の
花の姿か、色に出て、
色に現はれ、繊弱（しなやか）に
からみてよるゝ「運命」の
それにも似たり、哀れ淋しく。

踏み分け入りし森の奥、
筋目もわかぬ木下路（こしたじ）や、
足の労れのいやますに、
住みゆき場所（ところ）何方ぞ、
尚ほも見えねど、吾は進ぬ。

海

海のかなたへ、たへ／〃＼に、
ひろがりわたる浪の調べ、
曲(ふし)は優(やさ)しく、白銀(しろがね)の
絃(いと)をたはしる阿古屋玉。

人間道のなりわひを、
あざけり笑ふ浪の調べ。

星

椰子の葉末に燃えあがり、
天(あま)さかりゆく黄金の

星の言(こと)の葉(は)君知るや、
知らずば吾れと伴(とも)にゆき、
傾ぶく迄もきくが嬉しき。

青空文庫情報

底本：「沖縄文学全集　第1巻　詩※［#ローマ数字1、1-13-21］」国書刊行会
1991（平成3）年6月6日第1刷
初出：落葉のなげき「琉球新報」
1909（明治42）年3月4日
物の哀れ「琉球新報」
1909（明治42）年3月4日
まぼろし「琉球新報」
1909（明治42）年3月4日
春「琉球新報」
1909（明治42）年3月6日
朝「琉球新報」
1909（明治42）年3月6日
望郷「琉球新報」
1909（明治42）年3月6日
小曲「琉球新報」

1909（明治42）年3月8日
海のさち「琉球新報」
1909（明治42）年3月8日
北半島「琉球新報」
1909（明治42）年3月8日
秋「琉球新報」
1909（明治42）年3月10日
口笛「琉球新報」
1909（明治42）年3月10日
片葉貝「琉球新報」
1909（明治42）年3月12日
哀音「琉球新報」
1909（明治42）年3月12日
夜「琉球新報」
1909（明治42）年3月15日
影「琉球新報」
1909（明治42）年3月15日

白明「琉球新報」
1909（明治42）年3月15日
漁夫「琉球新報」
1909（明治42）年3月19日
人ふたり「琉球新報」
1909（明治42）年3月19日
森「琉球新報」
1909（明治42）年3月28日
海「琉球新報」
1909（明治42）年3月28日
星「琉球新報」
1909（明治42）年3月28日
※表題は底本では、「小曲二十［#「二十」に「（ママ）」の注記］篇」となっています。
入力：坂本真一
校正：良本典代
2017年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小曲二十篇

漢那浪笛

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/